

## 異生物の性玩具にされた少女の物語

——この世界が他の世界の住人たちから垂涎の的として狙われていることは、いまや生まれたての赤ん坊を除く全ての人類の共通周知事項といえる。なぜ狙われているかという点、その原因は神と人間にある。この世界が神の寵愛を受けた人間たちに支配された世界ゆえ、次元の向こう側に存在する別世界の住人たちから狙われているのだ。

神が世界を創った際、自分に模した存在として人間を創ったのは聖書に記述された通りである。だが、神が人間世界を創る前、他にも多くの世界を創っていたことは知られていない。それら世界は人間世界を創るためのいわば踏み台であって、試し書きに使用された使い捨ての用紙と同じような存在だったからだ。そのため、創られてすぐに打ち捨てられ、長らく放置されたままになっていたのだが、それら世界には試作品の生物たちが数多く存在していた。

神の寵愛と祝福から見放された彼らは、光の当たらない漆黒の世界の中で、蠢き、這いずりまわりながら、憎悪と悪意と絶望を糧に何万世紀もの時間をかけて進化を重ねた。おそらくそれは、彼らを創った神すらも想像が及ばない事態であつたに違いない。

彼らは神に復讐しようなどと思つたことは一度としてなかった。ただただ神の慈愛に飢えていただけで、その強烈な飢餓感、次元の壁を超越する原動力へと転化された。そして彼らは次元の向こう側に未知の世界を見つけたのだつた。

神の寵愛に満ちた世界——人間界を。

彼らが狂喜したのは言うまでもない。

次元の壁に穴が開き、次元の向こう側の世界から侵略者が襲いかかってきた。

それは人間たちにとって予期せぬ災厄の到来と同義だった。

戦場となったのは、とある先進国の山奥に存在する小さな村だった。人口は千人にも満たないが、長閑で平穏だったその村は、たちまち阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

異次元からの侵略者たちは恐ろしいほど醜悪で、そして強大だった。今日においては「蠢く肉塊」とか「這い寄る吐瀉物」などと形容されることが多い彼ら侵略者たちの前に、村人たちは成す術がなかった。村人たちはたちまち虐殺されたのだが、その際の殺され方が尋常でないほど酷かった。

異次元からの侵略者たちは、村人たちを弄び、長く苦しめてから殺したのだ。特に若い女性や少女たちの扱いは目を背けたくなるほど惨たらしく、中には苦痛に耐え切れず、途中で発狂してしまったり、自ら命を断つことを選択する者さえもいたほどだった。

なぜ、異次元からの侵略者たちはそのような酷虐な所業をしたのだろうか。彼らは別に人間たちに憎悪を向けたわけではなかった。人間たちの中に詰まった神の寵愛を搾り取るために、残虐な殺し方をしただけのことだったのだ。しかしそれは人間たちにとってはまさに悪夢だった。

次元の向こう側の世界から、続々と侵略者たちが押し寄せてきた。彼らは数も多く、そして強大だった。瞬く間に「穴」周辺の町や村が襲撃され、万単位の犠牲者が出た。そして犠牲者の数は時間の経過と共に増加の一途を辿った。

もちろん、人間たちも一方的に蹂躪されていたわけではない。最初はその国の軍隊が出動し、やがて世界中の軍隊が集結して空前絶後の防衛作戦が展開された。相手が人間ではなく、ましてや地球上の生物ですらなかったから、倫理も論理もクソもなく、ありとあらゆる兵器が投入され、使用された。

人間は強かった。しかし、敵もまた強かった。次元の向こう側からの総攻撃は三度あり、そのつどなりふり構わぬ戦闘によつて防ぐことには成功したが、数え切れないほど多くの犠牲者が出た。

四度目の総攻撃を防ぐことはできない——そう判断が下されたのは、臨時の先進国首脳会談の席であった。いまはまだ、どうにか防衛線の拡大は防

ぐことができているものの、もしこれが一部でも破られれば戦火は全世界に拡大して収拾がつかなくなる。そうなったら終わりだ。そのような判断が下されて、平和と共存の道が模索されることが決まった。

といっても、相手は人間世界とは何もかもが異なる世界からやってきた異次元生物たちである。人語はもちろん、まともにコミュニケーションをとることさえ至難だと思われたのだが、これは杞憂に終わった。異生物たちは人間たちが思っているよりも遥かに知的で、知能水準が高く、そして貪欲なまでに好奇心が旺盛であった。かくして長い時間をかけて交渉がおこなわれ、和平案がまとまった。

異生物たちは当初、あくまでも人間世界を侵略することを望んでいた節があったが、戦いを通じて人間たちの強さが侮れないレベルであることを学習すると妥協案を提示してきた。それは人間の女性——それも若くて美しい女を弄び騷り殺す権利だった。異生物たちは人間の女性に異常なまでの興味と執着心を抱いており、特に彼女たちを悶え苦しめて味わうことを何よりも好んだ。

この提案に対し、人間側が反発したのは言うまでもない。しかし、これ以上の争いを望まないという声が増しに強くなると、妥協案に対する改善案を提示するという方法で決着が図られた。それは人間側が次元の狭間に異生物たち専用の「娼館」を造り、そこで異生物たちをもてなすというものであった。その場所では、女性を殺害する以外は女性に対して何をして構わない、という条項が付帯されたことを受け、異生物たちは納得したのである。

この案に関してはフェミニストたちを中心に反発の声が上がったが、それ以上に賛同の声が多かった。和平案で犠牲となる者は若い女性で、そして美人だ。世界的に見ても極わずかな犠牲で済むのだし、自分が当事者にならないければそれでいい、という考えが圧倒的多数を占めた結果だった。もちろん、それ以外にも、同性からの「嫉妬」という感情が多分に含まれていたことも事実だった。

とにかく、これによって和平案が成立し、次元の狭間に娼館が造られた。

そして世界中から選抜された美少女たちがそこに配属されることになったわけだが、自らの意思で赴いたほんのひと握りを除き、その他多くの美少女たちは強制徴集によってむりやり連行され、監禁同然で「客」をもてなすことを強要させられた。

人権を剥奪された彼女たちは、畏敬を込めて次のように呼ばれることになる。

「異生物たちの性玩具」と。

続きは本編でお愉しみください。